

学ぶところが輝く学校

茅ヶ崎市立汐見台小学校

学校だより 7月号

令和4年 7月 1日

校長 大越 敏孝



手をかけ 目をかけ 心をかけ ～汐小の米づくりへの取り組み～



例年より短い梅雨が明け、連日暑い日が続いています。校長室の窓辺で下校する子どもたちを見送っていると、「明日は、プールがあるんだ!」と嬉しそうに話してくれる子がいます。



6月6日(月)から新型コロナウイルスの地域の感染レベルが「1」になり、学校では水泳をはじめ、さまざまな校外行事や体験学習、外部講師による授業が盛んにおこなわれています。子どもたちの表情も豊かになり、行動もさらに活発になってきているように感じます。この間、2回行うことができた授業参観でのお子さんの様子はいかがだったでしょうか。

このような中、コロナ禍で中止していた米作りを復活させました。社会科や総合的な学習の時間の取り組みとして、5年生が田植えまで終わることができました。今回は、その取り組みの様子をお伝えします。

【もみ種(種もみ)まき】

松林地区にお住いで米作りをされている島崎久雄さんをお招きし、米作りのお話を伺いました。「おにぎり1個分のお米は、もみ種3粒で実ったお米の量と同じ」という話を聞いて、みんなびっくり。もみ種1粒も無駄にはできないことに気づきます。30cm×60cmほどのパレット(育苗箱)に、学級全員が順番にもみ種をまいていきました。種が「密」でなく、均等になるように一粒一粒まいていきます。パレットからこぼれたもみ種も、残さず拾い大切にしていまいました。



【田作り・田おこし】

3年近く休耕だった田んぼには、多くの雑草が生い茂り、地面もでこぼこになっていました。まずは、草取りをしてから、へこんだ部分に土を入れていきます。5年生全員が土のう袋に土を入れて屋上まで運び、地面を平らにしていきました。弱音を吐かずに、何度も往復する子、一度に何袋も持って上ってくる子がいて、感心しました。

土を運び終わった田んぼは、鍬(くわ)やスコップで耕します。しばらく使っていなかった田んぼの土は固く、簡単には耕せません。みんなで、何度も耕していきました。



【水はり・代掻き(しろかき)】

汐小の地下からくみ上げている井戸水を、耕した田んぼに流し込みます。しばらく水をはっていなかった乾いた田んぼを満水にするには、2日間かかりました。そのあとは、田んぼの土をかき混ぜて、さらに柔らかく平らにするための代掻きです。裸足になって田んぼの中に入る感触を味わいます。低学年の頃、汐小の田んぼで泥んこ遊びをした思い出がよみがえってきた子もいたようです。全身泥だらけになってしまった子もいました。



【田植え】

5年生がまいたパレットの苗は、発芽からの温度管理がうまくいかず、田んぼを満すだけの量になりませんでした。途方に暮れてそのことを島崎さんに相談したところ、「満月餅」という品種の苗をいただきました。また、島崎さんが米作りのお世話をされている松林小学校からも「喜寿餅」の苗をいただき、必要な苗の量が確保されました。

そして、6月24日(金)、天気にも恵まれ、晴天の下、保護者・地域の方々にもご協力いただきながら田植えをすることができました。

苗を等間隔に植えられるように目印のついたロープを張りながら、1か所3株ずつ植えていきました。どの子も真剣に丁寧に植えている姿が印象的でした。5・6時間目で3つの田んぼに苗を無事に植えることができました。

猛暑が連日続いています。今年の夏は台風が多くなるのではないかとも言われています。生命を育てることはとても難しいことだと感じます。さらに、汐小の水田の環境は海にも近く過酷です。このまま、うまく育ててほしいと願うばかりです。

稲穂が実り、子どもたちとみんなで収穫を祝えるように、手をかけ、目をかけ、心をかけながら、育てていきたいと思えます。

